

後期は、第3演習室にて。

0. オリエンテーション	10/3
1. 「科学技術とキリスト教」系の動向を見る	10/10
2. 科学技術の神学と聖書学	10/17
3. エコロジーの神学1	10/24
4. エコロジーの神学2	10/31
5. 環境・経済・政治	11/7
6. 生命論の神学1	11/14
7. 生命論の神学2	11/21
8. 「宗教と科学」関係史1	11/28
9. 「宗教と科学」関係史2	12/5
10. 「宗教と科学」関係史3	12/12
11. 「宗教と科学」関係論の現在	12/19
12. 原子力とキリスト教1	1/9
13. 原子力とキリスト教2	(1/16)
14. 文明の問いとしての科学技術	(1/23)
15. フィードバック	

<授業の概要・目的>

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、こうしたキリスト教思想を取り巻く思想状況を念頭に置きながら、キリスト教思想の新たな展開の可能性について議論を行いたい。

そのために本講義では、キリスト教思想とその宗教哲学的基盤の探求というアプローチが試みられる。キリスト教思想の新たな展開には、こうした根本からの議論の組み立てが要求されるからである。2017年度後期は、「科学技術とキリスト教」系の諸動向を参照に現代の宗教哲学の課題を考える。

<成績評価> レポートによる。

<受講の注意事項>

・受講生には、講義内容を理解するために必要な復習を行うのはもちろんのこととして、各自の研究テーマとの関係づけを行うための発展的な学習が求められる。必要に応じて講義担当教員との研究相談を行うことが望ましい。

・質問は、オフィスアワー（火3・木3）を利用するか、メール（授業にて、指示）で行うこと。

<配付プリント>

<http://tillich.web.fc2.com/sub5av.html> に掲載。

<導入> 「宗教と科学」関係論」に向けて——科学、宗教、呪術

1. 科学と宗教、両者の関係は、単一か？

近代科学（ニュートン力学をモデルとして、18世紀に確立した、実証主義的近代科学）が唯一の科学概念とすれば、古代、中世に「科学」は存在しないことになる。あるいは、現代科学の中にも「科学」ではないものがあることになる。

2. 「科学」は古代科学や中世科学も科学であるとして捉えうるように、概念化する必要がある。

同様のことは、「宗教」についても当てはまる。

3. 近代以前の伝統的社会における、科学、宗教を論じるためには、第三項としての「呪術」を視野に入れることは有益である。

また、科学と技術との関わりも、明らかにすることが必要。

4. 人間の共同的な営みとしての「科学」「技術」「宗教」。

↓

「意味」「意味行為」「意味世界」から「科学」「技術」「宗教」へ。

<今年度の「キリスト教学講義」より>

(2)意味の問いとしての宗教

1. 本講義の概念規定(仮説1)。

「人間は意味に固執する存在である」+「人間は本質的に宗教的である」

2. 人間の生物学的条件から。「人間はもともと不完全な動物である」。

20世紀の哲学的人間学(シェーラー『宇宙における人間の位置』、ゲーレン『人間——その本性および世界における位置』)など)において、詳細に展開された議論である。

・不完全さ＝誕生時の環境適応力の欠如

＝自由(活動によって自己と世界を構築できる)→「自由とは何か」

・「人間は考える葦である」(パスカル)、「自己－世界」構造の可塑性

3. 「象徴を操る動物としての人間」(カッシーラー)→意味世界の構築

4. 象徴を操る能力によって構築された世界(自らの存在意味が確認できる世界、自分らしさが確保できる世界)を「意味世界」と定義する。

5. 結論:「人間は意味に固執する存在である」、意味世界を離れては、人間は人間らしく生きることができない。

6. では、意味世界はどのような仕方で構築されるのか。

知識社会学(バーガー+ルックマン):個人と社会の弁証法

外在化(表現)／客体化(疎外)・制度化／内在化(社会化)

7. こうして構築されたわたしたち人間の意味世界は次のような特性を持つ。

意味世界は相対的である、歴史的あるいは偶然的である→恣意性・無根拠さ

意味世界は意味世界内部では根拠付け得ない。

8. 意味に固執する動物としての人間。

無意味性の脅威 → 人間は意味世界を安定化させるものを求める

9. 無根拠な意味世界を安定化させる装置として社会的心理的に生み出されたのが、「意味世界の正当化としての宗教」(なぜに答える、生に意味を与える宗教の機能)である。

10. 以上の結論:「人間は本質的に宗教的である」

11. 宗教の概念規定(仮説構築)の基本方針＝「広すぎず・狭すぎず」

宗教の普遍性と現実の限定性

12. ティリッヒの宗教論

広義の宗教概念(意味根拠としての宗教・意味世界の正当化としての宗教)と狭義の宗教概念(制度化された既成宗教・常識的な意味での宗教)との区別。

13. ルター「大教理問答書」(『信条集 前篇』新教出版社、91頁)

「金と財産をもっている時に、自分では神とあらゆるものを豊富にもっていると考え、これに信頼して、高慢にも人に対して何とも思わない者が多くある。見よ、このような人はまた、マンモンという名の一つの神、すなわち、金と財産をもっており、彼はそれに自分の全心をかけている。そして、かかるものは地上でもっとも一般的な偶像である。……同様にまた、すぐれた技術・才能・寵愛・友情・名誉、をもっていることに信頼してそれを誇る者も、一つの神をもっているが、それは唯一のまことの神ではない。」

以上の引用においては、「神」が二つの意味で、広義と狭義の両方の意味で使用されていることに注目。

<参考文献>

1. 芦名定道 『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』(小原克博氏との共著)

世界思想社、『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。

2. バーガー＝ルックマン 『日常世界の構成』新曜社。

3. バーガー 『聖なる天蓋——神聖世界の社会学』新曜社。

4. ルックマン 『見ない宗教——現代宗教社会学入門』ヨルダン社。

5. カッシーラー 『人間——この象徴を操るもの』岩波書店。

6. 盛山和夫『社会学とは何か 意味世界への探究』ミネルヴァ書房。

5. 科学と技術：意味世界の合理性（因果性・力）

・科学＝合理的知（世界と人間）、この合理性の具体的な理解が古代と現代では異なる。

・技術＝合理性に基づく実践的活動（世界と人間の改造あるいは形成）

科学・技術：世界観に基づく営み

古代からの伝統的な世界観＝伝統的な意味世界

科学：占い

技術：呪い

6. 伝統的な「呪術」は、技術の母体である。

古代の呪術は最先端科学技術に相当する → 権力によって独占すべき事柄

違いは、合理性の内容にある。類似と接触。

7. 近代以降、科学と技術は、科学・技術あるいは科学技術という形態を基本にするようになった。

8. 宗教：聖なるものの顕現とそれに対する人間の応答

意味世界の生成あるいは根拠付け、そのイメージ化

ヒエロファニー：世界軸、三層構造世界観あるいはコスモスの生成

9. 古代の場合：占星術の歴史

古代バビロニアから世界へ

キリスト教の場合

日本古代

10. 現代はどのようになっているか。

科学技術という形態

三層構造世界観の平面化

あるいは近代的世界観とその内部での意味世界の二重化（公と私）

公の一元化と私のアトム化（細分化）

公が揺らぐとき、意味世界は一挙に不安定化する。

<参考文献>

1. 芦名定道『宗教学のエッセンス——宗教・呪術・科学』北樹出版。

2. 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社。

第一章「宗教と終末思想」

1 宗教とは何か

2 意味世界とユートピア

3 現代の宗教的状况と終末思想

3. 藤原聖子『「聖」概念と近代——批判的比較宗教学に向けて』大正大学出版会。

4. 江藤純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛』上巻・下巻、Lithon。

<書評・初稿原稿> 『週刊読書人』第3192号（2017年6月2日）掲載。

江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛 上下巻』LITHON、2015年3月／2017年2月。

芦名定道

近代日本に宗教学が導入され、一〇〇有余年。この間、多くの優れた研究成果を生み出しつつ、日本の宗教研究は進展してきたが、現在、それは確実な実りを迎えてつつある。このことを明確に物語る論文集が刊行された（宗教学叢書の一角をなす）。扱われるのは、「呪術」であり、それは古今東西を通底する人類の裏面史を連想させつつも、宗教研究の中心テーマ、いわば王道とも言える。本論集は、上下巻合わせて八〇〇頁を超える大きさであるが、以下、本論集の目的と構成を説明し、続いて、ポイントを絞って、いくつかの注目すべき内容を紹介する。最後に若干のコメントを行いたい。

上巻「はしがき」によれば、本論集は、一九六〇年代以降進められてきた近代西欧的な

religion 概念の問い直しを受け、宗教学で多様に扱われてきた magic 概念に、「事例に則して概念生成の場、概念使用の場」に立ち返ることによって、光をあてることをめざしている。それは、magic 概念を自明視したり定義づけたりするのではなく、magic 概念の諸相を浮かび上がらせる試みであって、それに従って、本論集は上下巻ともに、第一部「呪術概念の系譜」「呪術概念の再検討」（＝学問的概念化の諸相）と、第二部「事例研究」という二部から構成される。第一部、第二部ともに、短い書評では紹介しきれないほど多様な内容を含んでいるが、まず第一部では、アメリカ、イギリスとフランス、ドイツ、日本（上巻）、西欧精神史、社会学年報学派、イタリア（下巻）といった多様かつ代表的な文脈において呪術理解・呪術研究が辿られる——第一部には宗教学の多くのパイオニアたちが登場する——。第二部では、アジア（インドネシア、中国、朝鮮）、日本（近代から現代）、オリエント・西洋（メソポタミアから西洋古代・中世・近現代）といった広大な領域から数多くの事例が取り上げられている。

本論集において、書評者として特に印象に残ったのは、次の点である。まず、第一部の呪術概念の「系譜」「再検討」についてであるが、第一部の諸論考からわかるのは、呪術（magic）は広範な西欧近代の知的世界を横断し問題として共有される一方で（科学や宗教に対する呪術）、その問題の具体化は、それぞれの文化圏（国民国家／言語圏）によって多様であることである。「これまで宗教学ないし人文社会諸学の『呪術』概念が問題にされる際は、そこに西洋諸国間で違いがあるという指摘はなされず、『西洋近代的』と一括りにされるか、個々の学者の呪術論が取り上げられるかだった」（上巻四七頁）が、しかし、「概念を構成する語彙には歴史があり、歴史の中で蓄積されたイメージを無視することはできない」（上巻二九二頁）。こうして「呪術研究」という視点から、西欧の学問的世界をより精密に見ることが可能になるのである。次に第二部について。ここに収録された膨大な事例の量には正直圧倒されるとしか言いようがないが、古代メソポタミアの「祈禱呪術」から現代日本のTVアニメーションの「魔法少女」やサブカルチャーまで読み通しての印象は、人類史を通底する深層あるいはダイナミズムの存在である。もちろん、これはいわば単なる印象と言うべきものではあるが、人類史の古代と現代、また洋の東西を繋ぐ結節点として「呪術」は位置づけ得るのではないだろうか。なお、書評者としては、システムにおける「複雑性の縮減」、「生物学的合理性」、「マギア」と広義の「神秘主義」概念の重なり、といった論点を繋ぐと面白い議論ができるのではないかなどと、想像をめぐらした。呪術は魅力的な題材である。

これまで紹介してきたように、本論集は現代日本の宗教研究における良質で豊かな研究成果と評すべきものであるが、「狭義の〈呪術概念論〉」あるいは呪術の厳密な概念規定を提示することはめざされておらず、したがって、本論集の議論はさらなる問題連関へと開かれている。とすれば、書評者の立場から、いくつかの議論の追加の可能性を示唆することは、的外れではないだろう。たとえば、「呪術」は近代的学問の成立の文脈において多様な仕方で論じられてきたわけであるが、近代科学（近代的学）のモデルとなった科学革命の担い手（特にニュートン）が、近代科学的知と呪術的知の両方にまたがる世界に生きていたことは注目すべき問題と思われる。科学的知と呪術の関係は実のところいかなるものだったのだろうか。また、呪術は近現代の文学作品の題材であるわけだが、たとえば、トーマス・マンの『魔の山』などを介するならば、呪術は欲望（病いを癒されたい）や身体へと、つまり医療人類学的な問題設定へ繋ぐこともできるはずである。本論集を手がかりに、読者は「呪術」という魅力的世界の探求を続けることができるのである。さらなる思索への招待。これが本論集の魅力である。

（あしな・さだみち）